

- 1 〔つ・ば・さと動くくちびる夏はじめ〕
- 2 〔夕虹を指すに遅れて嗚呼と云ふ〕
- 3 〔ふかぶかと白靴を晴野が匂ふ〕
- 4 〔水かげろふ日傘のうちを照らしけり〕
- 5 〔涼しさや龍をふちどる金ひとすぢ〕
- 6 〔林開けて向かひあはずに椅子がある〕
- 7 〔ナトリウムランプ抜け五月のばか太い樹〕
- 8 〔量子力学袋の中に玉虫ゐ〕
- 9 〔昼顔に白犀ほどの雲ありぬ〕
- 10 〔少年の眼濁流めく午睡〕
- 11 〔水無月晴れて花の名前の若くあり〕
- 12 〔金魚弱りてはればれと鳴る時計かな〕
- 13 〔煙草の箱夏瘦の手をはみ出せる〕
- 14 〔眼のよどむ帰路ごきぶりがよぎりゆく〕
- 15 〔白鳥を離れみどりの藻の夜涼〕
- 16 〔うすい皿かさなる虫の闇のなか〕
- 17 〔画家がゐて屋根裏にひとつのランプ〕
- 18 〔木曜の山羊よこたはる昏さかな〕
- 19 〔蝸やわづかに花を降らせる樹〕
- 20 〔ゑのこ草川の疲れの絶え間なく〕
- 21 〔絵本閉づれば真葛原まで続く道〕
- 22 〔をなもみよ野原の磯に似るところ〕
- 23 〔曼珠沙華鳴くとき尖る鳥の舌〕
- 24 〔どろどろと空耳そだつ野菊かな〕
- 25 〔檸檬まで来たりて白き川の音〕

- 26 抽斗が荻のどしやぶりへとつづく――
- 27 黄落を二手にわかれ鳩が来る――
- 28 逝く秋がまぶしい海としてわかる――
- 29 貝食うて枯木のうへに雲来たり――
- 30 火事場帰りの胸元にペン差しなほす――
- 31 造花ひまわり北風に晒してパチンコ屋――
- 32 セーターのひと縦の木を囲みけり――
- 33 山系明ける部屋に暖炉の余熱かな――
- 34 毛糸玉とはもう言へぬ平たさよ――
- 35 三月のひかりに壇の傷あらは――
- 36 菜の花の中の蛇口の涸れてをり――
- 37 風車西の市場の違ふ匂ひ――
- 38 蛭烏賊青菜に目玉こぼしをり――
- 39 とどまれば髪ぬるくなる虻の岸――
- 40 青銅匂ふ花屑の色抜く水に――
- 41 蛇の頭のしなびて流れよりあがる――
- 42 沼はおほきな樟脳の昼寢覚――
- 43 まどろみを歩くどこにも草いきれ――
- 44 足の重さは如雨露ほど虹を見にゆく――
- 45 滝壺にあるなまぐさい手足かな――
- 46 ほたるぶくろ手をひきながら呼びに来る――
- 47 灼けながらばらばらに来る犬の脚――
- 48 青鷺はビル光のなか展けてある――
- 49 ががんぼの脚途中なるその感じ――
- 50 金網を蝙蝠しろい裏がゆく――

- 51 〔あたたかくくづれてゐたる螢かな〕
- 52 〔いつまでもくらげはみづにつきあたる〕
- 53 〔はつ秋の齒車の組む山羊のかほ〕
- 54 〔吹かれつつ茸となつて痩せほそる〕
- 55 〔まづしい肩いくらでも朝顔が咲く〕
- 56 〔椋鳥がゆめのつづきに渦巻くよ〕
- 57 〔縫針に喉うづく秋晴の蔵〕
- 58 〔芋虫がゐて空腹の廊下かな〕
- 59 〔睡りぐすりが喉とどこほる鳶の部屋〕
- 60 〔背高泡立草こけた頬ときにまぶしい〕
- 61 〔菊までのなかばを座礁するひかり〕
- 62 〔こほろぎにとりどりの靴ゆき過ぎる〕
- 63 〔空をふと忘れて秋の蛇のこと〕
- 64 〔小鳥来るくちびるの皮食べてゐて〕
- 65 〔ぼうつとゑむひとびとを去る鶉〕
- 66 〔鶏頭はなつかしいどしやぶりを吸ふ〕
- 67 〔傘閉ちて冷ややかに背景となる〕
- 68 〔秋冷えはみごとな鳥にない乳房〕
- 69 〔霧にこゑ肉のからだをさしおいて〕
- 70 〔夜霧よりくぐもる鳩を取り出しぬ〕
- 71 〔鶴来るに工場回るふるい熱〕
- 72 〔つめたい山札夜通してのひらがめくる〕
- 73 〔木の葉ねむたさ糸を引く口のなか〕
- 74 〔風花よ肉いちまいを口にいれ〕
- 75 〔そぷらので来るむささびの気圧かな〕

- 76 布巾煮る鯨が覆ふたそがれで――
- 77 犀がゐてはじめを曇りがちの春――
- 78 朧夜のまばたきをみづ這ひのぼる――
- 79 藁が幽霊よりもどつとある――
- 80 野遊びのきれいな耳についてゆく――
- 81 みづかきの昏さにたんぼぼの綿毛――
- 82 首すぢの熱さへずりに曝しをり――
- 83 永き日を部屋まで海が照つてゐる――
- 84 走ると見えないさくらはなびらそのひかり――
- 85 うすびかりして花過の四肢の端――
- 86 はつなつの陰を排せる琴の部屋――
- 87 痣がちの四肢を余せり夏館――
- 88 わたくしが丸太のやうな黴の館――
- 89 夏は夜明日ゆく川のやうに伏す――
- 90 夏風邪の厨にたくさんの水面――
- 91 眼ねばつく何もない冷蔵庫――
- 92 おほみづあを睡りのなかに透けてゐる――
- 93 夢にまでニュートン算の牛が来る――
- 94 もうろうと昼顔だけがある景色――
- 95 灼けた窓からすこし見えるくさい港――
- 96 くちなはのかぼそい赤につづく舌――
- 97 凌霄よ眼鏡にほそい雨がふる――
- 98 虹見せてくる眼球はすこし丘――
- 99 髪洗ふそのつどにはとりに似るよ――
- 100 こゑは鋭利にくちびるを濡れ夏終はる――